

家族も本人も、 自然に笑顔になれる『場所』

町田市認知症友の会



町田市認知症友の会 090-5209-3107

厚生労働省が2016年1月に発表した資料によると、2012年時点の認知症患者数は全国で約462万人。65歳以上の約7人に1人が罹患している計算になる。団塊の世代が75歳以上となる2025年には、その数は約700万人を突破し、5人に1人が認知症になると言われている。約10年で患者数が1.5倍にも膨れ上がる認知症は誰にでも起こりうる身近な病気だが、その実態や苦勞はなかなか理解されていないのが現状でもある。そして介護者は孤立無援の思いに悩むことも多い。そんな家族に寄り添い、支える市民団体が、「町田市認知症友の会」だ。

2011年に発足したこの会は、現在20名弱のサポーターと認知症本人、そしてその家族を合わせ約40名が参加している。偶数月に行われる本人、家族、サポーターとの交流会のほか、11月の「キラリ☆まちだ祭」ではよさこいを踊り、12月の「まちカフェ」にもブース出展している。交流会は鶴川第2高齢者支援センター内のレストランで昼食をとった後、講演や音楽鑑賞、ゲームやカラオケなど趣向を凝らした内容で楽しい時間を過ごす。夏にはバーベキュー、冬には餅つき、春には恩田川で花見も行う。認知症の専門家を招いての講習や家族同士の情報交換は実に有益で、交流会には

毎回約30名が参加する。

代表を務める井上美恵子さんは、58歳の若さで認知症を発症したご主人を5年前に見送った。小児科の看護師として仕事を続けながら、「主人と同時に義母を介護し、言葉にできないほど過酷な生活を送ってきた。『仕事中心に、家からいなくなり町田から遠く離れた場所で保護していると他県の警察から電話が来たり、どうしていいかわからなかった。認知症はいつ誰にでも降りかかる可能性がある病気。だから、正しい知識を持って、認知症本人の思いや介護する家族のことをもっと理解してほしい。』

交流会では専門的な知識や技術だけでなく、介護経験者ならではのアイデアの共有や、介護で疲れた家族の愚痴を皆で聞くなど、ストレス発散の場としても機能しているようだ。

交流会では専門的な知識や技術だけでなく、介護経験者ならではのアイデアの共有や、介護で疲れた家族の愚痴を皆で聞くなど、ストレス発散の場としても機能しているようだ。

鶴川 川在住の西口さん親子は3回目の参加だ。「母と一緒に参加できるイベントがほとんどないので、こはとでも有難い。母はとても楽しそうだし、私も母の新たな一面に気づくことができ、本当に参加してよかった。これからも参

加し続けたい。母親の宮崎さんも、大好きな歌を歌えるこの会が楽しみでならないのだという。

参加者は少しずつ増えているものの、会の認知や広報が課題でもある。支給される補助金も僅かで、経費を賄える状況ではない。ボランティアや家族が手弁当で参加している厳しい状況が続いている。

「私 自身、家族を見ていたあの頃、このことを知っていたら…と思うことがたくさんある。また、あの時他の人に救われたこともたくさん。だから、今度は私とその渦中にいる人たちに寄り添って、力になってあげたい。そして、地域で支え合えば、家族はもっと楽になれるはず。」

サポーターの中でも中心となり運営するスタッフは皆、患者の身内だ。既に家族を見送った人もいれば、まさに介護の真っただ中で、日々格闘している人もいる。今や高齢者だけでなく、40代、50代でも起こりうる認知症。そして、その介護という現実。身を以て体験したからこそ分かる真実を少しでも多くの人に知ってほしい。—そう語る井上さんのはじける笑顔と力強いまなざしが印象的だった。



E



D



C

A.B. 6月に行われた交流会。会場には本人と家族、そしてサポーターの笑顔が溢れた C.『キラリ☆まちだ祭』に向けて行うよさこいの練習 D.食後、コーヒーを飲みながら口腔ケアの専門家による講演に耳を傾ける E.普段は健康福祉会館で看護師として乳幼児検診に携わっている井上美恵子さん。癒しは「子どもの笑顔」と言う

